

武田泰淳研究

——父・大島泰信の句集について（上）——

長田真紀

Maki Osada

キーワード：武田泰淳・大島泰信・仏教・俳句

武田泰淳の父、大島泰信（明治七年三月二十四日―昭和二十七年三月十八日）は、大正大学教授として宗教学を講じ、『佛教讀本』一、二卷（明治四十年五月、九月）や、『浄土宗史』（大正三年一月『浄土宗全書』第二十卷に収載）の著作がある浄土宗の学僧であった。しかし、「口下手の上に、文章を発表するのが何より嫌い」で、「葉書は二、三行で、電報みたい」だったという。

ただし、句作は大いに楽しんだ。また、家族や近親者が会した折りなど、しばしば気軽な句会を催し、そこには泰淳も加わることも多かったという。

さて、このたび、大島淑氏（武田泰淳の兄嫁・大島泰雄夫人）のご高配により、大島泰信の自筆句集一冊を閲覧させていただく機会を得た。未公開未発表のものである。

この句集には、昭和二十年三月二十七日から同年八月二十八日ま

でほぼ毎日継続的に詠まれた俳句が書き記されている。

句集は市販の原稿用紙を用い、それが綴じあわされている。

本稿では、まずこの句集全文を紹介したい。なお、仮名遣い、旧漢字の表記、句点の施し方等原文のままとした。

會津詠艸

三月廿七日 霜の朝重荷に喘き坂登る

病後の荷の重過ぎる疎開旅  
彼岸過ぎ満野の雪や汽車の窓

残雪や月の會津に疎開かな  
陽に當る雪の會津や二老僧

二老翁雪積む庭に陽に當る  
廿九日 今日もまた日向ぼっこや老和尚

雪融水の小溝に溢れ流れけり  
雪融の水を小溝に流しけり

三十日 残雪の山取毀つ和尚かな

卅一日

大僧の除雪手傳ふ小坊かな  
 何時消ゆる目安もつかぬ雪の山  
 枯草の湯に寛ろくや疎開客  
 枯草の湯の何時までも暖かき  
 湯に浸り遥か都の空想ふ  
 雪水に小舟浮すや嫗たち  
 雪融水に嫗小供と舟流す  
 滔々と急流をなす雪融水  
 雪融水溝を溢れて瀧と成る  
 残雪の消え間に青き菜の葉かな  
 残雪の合ひ間々々に青葉かな  
 残雪の泥濘路や茶の馳走  
 築山の残雪越えて見られけり  
 残雪の日に低くなる暖かさ  
 花に背き雪の會津に疎開かな  
 春来くとも隅田上野は焼野原  
 花咲くも誰か眺めん疎開跡  
 花咲くと立ちて眺むる人もなし  
 本来の無一物なり焼野原

思ひ出で

荷も人も無理に押込む疎開汽車  
 體操の骨で飛ひ込む疎開汽車  
 子負婦も窓より押込む疎開汽車  
 背の子の泣くも押込む疎開汽車  
 乗込むや握飯取り出す疎開汽車  
 風呂桶や箆笥持込む疎開汽車

四月一日

辨慶の七つ道具や疎開汽車  
 空襲の話のはづむ疎開汽車  
 行く先の心元なき疎開汽車  
 入學の今日空晴れて孫ら行く  
 入學の今日彼方此方に疎開かな  
 入學の喜も見す疎開かな  
 入學の唱歌嬉しむ疎開人  
 入學の子等嬉々として歩も軽く  
 入學の喜び載せて唱歌の聲  
 入學の喜もなき都かな  
 入學の先つ喜はランドセル  
 入學の日には手磨れてランドセル  
 入學の中味は何かランドセル  
 残雪の消えて抜かる、古大根  
 縛られて日に晒さる、古大根  
 時世とて可愛がらる、古大根  
 地表の半は腐れる古大根  
 雪消えて陽光の強く照る古大根  
 開墾の仕事始や胡桃断る  
 建國の今日は邊土の疎開かな  
 建國の今日も憎つくき夷狄ども  
 建國の神意いかでか背くべき  
 建國の今日ぞ懲さん夷狄ども  
 雪解の庭にあちこちふきの臺  
 雪跡の黒き庭地にふきの臺  
 雪跡の庭地に青きふきの苔

四日

雪跡ゆきあとの汚葉よごばを擡もたげ落おの苔こけ  
 雪解ゆきとけけに汚葉よごば隠かくれの落おの苔こけ  
 建國けんこくの今日けふ沖繩おきなわに敵てき來きる  
 建國けんこくの意氣興いききよすへく敵襲てきしゆに  
 疎開そかいして花はななつかしむ昨日けふ今日けふ  
 空襲くうしゆに花はなは散ちらずや昨日けふ今日けふ  
 空襲くうしゆに花はなの音信おんしんもあらはこそ  
 春はるの雪迎ゆきむかへられ行く新發意しんぱつい  
 新發意しんぱつい連つれられて行く春はるの雪  
 都みやこには花盛はなもるらし春はるの雪  
 疎開そかい者に物珍ものめづらしき春はるの雪  
 降ふるほどに積たると見えぬ春はるの雪  
 春はるの雪炬燵炬燵擁擁して物語ものごとる  
 春はるの雪炬燵炬燵に當あり日の永ながき  
 春はるの雪炬燵炬燵に當ある果報者くわくぱう  
 春はるの雪空襲くうしゆ遠とほく疎開そかいして  
 春はるの雪孫まごらを想おもふ炬燵炬燵かな  
 降ふるほとに寒ささ覚えぬ春はるの雪  
 残雪まどらの斑まだらを消けして春はるの雪  
 松まつの葉はに斑まだららに残のこる春はるの雪  
 春はるの雪積たる木梢きすゝめに鳶とび二匹ふたひき  
 春はるの雪屋根ゆきやねに残のこりて日暮ひぐしる、  
 風説かぜすれは脊せむつかゆき半風子はんかぜこ  
 一日いちにちを炬燵炬燵で暮くす疎開そかいかな  
 時々は厭いとな香かもする炬燵炬燵かな  
 悪臭あくしゆも時に興おこある炬燵炬燵かな

五日

三人さんにんか顔見合かおみあする炬燵炬燵かな  
 春雪はるゆきに鳶とび鳴なく庭にわの炬燵炬燵かな  
 いろくいろくの鳥とり來きて鳴なく炬燵炬燵かな  
 空砲くうぱうの出所しゅつじよの詮議せんぎ炬燵炬燵かな  
 四月しがつにも寒風かんぷう荒あぶ會津えつかな  
 寒風かんぷうに炬燵炬燵圍かこみて疎開そかい人  
 幾枚いくまいも着物きもの重おもねて疎開そかい人  
 寒風かんぷうに外出がいしゅつ恐おそれて炬燵炬燵かな  
 日向ひなたボコも今日けふは遠慮えんりよの疎開そかい老  
 寒風かんぷうや土手どてに草摘くさむむ女子こしよ等  
 寒風かんぷうや兒等こどもら嬉うれ々として飛び廻まわる  
 奥城おくぎや残のこりの雪ゆきに草芽くさめぐむ  
 奥城おくぎや樹々じゆじゆ荒涼あうりやうと烏啼くわていく  
 寒風かんぷうや兒等こどもら戯あそんで鳶とびの啼なく  
 乾柿かみに茗茶めいさを啜すすむ炬燵炬燵かな  
 乾柿かみに兒等こどもら懐なつかかしむ炬燵炬燵かな  
 乾柿かみに昔むかしを忍しのぶ炬燵炬燵かな  
 古切ふるきれを繕つくふ姫ひめ炬燵炬燵かな  
 春寒はるがむや硝子びやうしよ樟子まに膚沁かわひる  
 春寒はるがむや額かぶたを包かむ疎開そかい翁  
 春寒はるがむや塔婆たつぱ倒たれて石凍いしどうる  
 春寒はるがむの木の葉はを染ぞめてたそがる、  
 春寒はるがむの夕日ゆふひに燃もえる墓かぶの森  
 春寒はるがむの夕陽ゆふやう紅べにく窓まどを染ぞめ  
 残雪まどらに夕陽ゆふやう赤あかく寺てらの庭  
 雪解ゆきとけの水みづ滔た々と東山とうざん

六日

七日

四方の山雪を被りて湯の旅宿  
疎開児の貌寒けなり出湯の宿  
避難者の同し仲間や温泉の中  
雪の山分け登り行く温泉の宿  
温泉に焔塵流す都人  
温泉の宿見張らす限り雪の山  
湯疲れの歩行も重く雪の風  
壽の字松雪除繩の揺れてゐる  
残雪に影低くして石燈籠

八日

遠方近方の雪の山々日に映ゆる  
古寺の小暗き室に爐火煙る  
古寺の欄間煤けて留守居僧  
古寺の尼薪採りに雪の山  
古寺の影寒むくと大銀杏  
軒下に日向ぼつこの留守居僧  
富豪の隣は寒き貧乏寺  
白壁の奥に小寒き破れ寺  
壁落ちて襖破れし寺寒し  
古寺の佛もふりて影寒し  
深雪に麦も菜種も腐爛する  
残雪を踏んで古寺覗きけり  
古寺の御堂空洞と春寒し  
古寺の留守居老翁の髭寒し  
長橋や春の日暮に歩遅く  
乗合に取残されて春寒し  
十日  
開墾や立木根抜きに和尚かな

九日

十二日

開墾を口て手傳ふ疎開人  
雪融の跡日に乾き芽青む  
雪水に影揺れてゐる庭の松  
雪除の繩揺れてあり庭の松  
春雨や残の雪に音もなく  
春雨や雪融水に細浪す  
春雨や松か枝越に寺の屋根  
春雨や寺の屋根赤く黄昏る、  
春雨や庭に燈籠の苔白く  
雪水に庭樹映えて陽光る  
雪除の脱げて樹色の陽に映える  
丸苺の躑躅湯に映え花芽くむ  
鳶飛んで春庭に影の大きさよ  
春庭に病後の人の杖を引く  
春庭に病後の杖のたどくし  
空襲の此にも響く春の庭  
警報や病後の人は春の庭  
空襲も閉ちて四方の雪の山  
空襲に何れの濠も雪の水  
空襲や退避飛ひ込む雪の水  
空濠は雪融水に船を浮け  
防雪の除れ掃除後の庭の面  
雪跡の松緑濃き寺の庭  
雪跡の掃除手傳ふ疎開客  
雪跡の掃除済して松を見る

十四日

十三日

百年の松雪跡に屹然と  
防雪の苦心の見えて寺の庭  
防雪の苦勞は知らず寺の客  
鶺鴒のつなひ小石傳に水寒むみ  
鶺鴒の雪水影に影を宿し水飛ふ  
春風や貧農の馬老いて軒毀つる  
田舎家の馬老や瘠せて節句哉  
屋敷賣り馬は瘠せたる老の春  
屋敷賣り飴嘗めてゐる老の春  
屋敷荒れ軒傾きて節句哉  
籬の節召集に出る白壁家  
大柳風に揺られて芽ぐむ見ゆ  
新しき門兵衛姿や籬節句  
門兵衛の姿も今日は節句哉  
色々の馳走の數や籬の節  
翁おきな嫗招かれて行く籬節句  
田舎道柳の風に籬の節  
念佛ねんぶつに翁婆おきな集ふ節句哉  
老爺老婆の大鼓奉る節句哉  
大鼓奉あけ翁嫗踊る節句哉  
人と共に馬も老いたり春の風  
瘠馬の農家の庭や春の風  
應召の旗はためくや籬祭  
籬祭り應召送る旗も見ゆ  
籬祭り二日休業の田舎哉  
農業も休みて祝ふ籬節句

此地乃旧曆節句

十五日

十六日

農業の仕事始や籬節句  
残雪を擴け散らすや庭の中  
残雪の餘少なく春陽さす  
日曜を少年墓の掃除哉  
鮮人の水濠堀や春の風  
残雪の見るく融くる陽の強さ  
小供等の無事の音信たよりや春の風  
空襲の今日は何處そ胸騒こぞく  
田の畦あぜに芹を摘みけり去年の春  
理髮して羽織を探す春の夕  
髭剃られ詫ましくなりぬ疎閑人  
鮮人の屁ツピびイ腰や春の風  
勤勞の水濠堀や春のどか  
種播きやゴム靴の女勇しく  
雪跡に相模取草のちらほらと  
菜菔み麦元氣づき梅の咲く  
瀬戸の雪やうく消えて梅の咲く  
雪跡の芝し焼く煙ね春風はるかぜに  
猛宗まうそうの雪に稍うしろ枯れ鳥騒ぐ  
虎杖いたどりの芽赤うして芝焼ける  
梅咲いて種播き人の忙しき  
鶺鴒の水浴ひてゐる暖かさ  
梅咲いて雙ひ鶺鴒の水浴する  
老翁も手傳てづかに出る農ら仕事  
老人も埃土を運ふ農ら仕事  
泥溝の若草萌えて水澄みぬ

十八日

十九日

都には桜散る頃梅咲きぬ  
忠臣の墓籬破れ堇すみれ咲く  
官軍の墓杉倒れ堇咲く  
奥城の縦横道や土筆摘む  
糞尿に線香交りて墓はたけ畑

二十日

記念日に兒等歌ひ舞ふ賑かさ  
記念日に舞踊一曲あざやかに  
銅婚の記念に一家集ひ舞ふ  
薪截りの疲れ体や萬年青鉢  
萬年青鉢横に眺むる假寝床  
浅月の味に日ねもす假寝かな  
春寒に炬燵くわなつかしむ疎開人  
ちらほらと桜綻ひ風寒き

廿一日

菜の花は蕾堅くて白胡蝶  
相模取は日々に色増あし咲き誇る  
盤梯はまだ雪白く桜咲く  
枝端えだの綻ひ初めし桜かな  
白虎隊自決の日なり桜咲く

廿二日

両軍の墳墓に詣つ學生等  
両軍の勇士の墓や桜咲く  
記念日に桜咲出て、古戰場

廿四日

梅桜柳を交せて會津城  
梅桜柳緑に會津城  
梅もよし桜よけれど柳かな  
梅も咲き桜も咲きて土筆摘む  
梅桜咲くや虎杖いたどり日に青く

廿五日

春緑はるの先驅さきするや垂れ柳  
春の水どじようを漁る里の子等  
春の水小溝にどじよう漁る子等  
朝に夕に色かはりゆく桜かな  
梅桜見紛ふ程の色の濃き  
硝子越音聞えずに滝沸なる  
絶壁の檜の林は寒むくし  
断崖の檜の根元や青き草

廿六日

バスに外づれ桜土産の帰り路  
桜あり心太あり温泉ゆの帰り  
バス眺め悔しくもあり桜咲く  
塀越はしに桜盛りの町小路  
春雨や桜咲きたる昨日今日  
春雷や満開の桜散り初めぬ  
春雷や花見る人の足世話し  
春雨や紅桜露に色映ゆる  
春雨に枝垂れ柳の緑濃き

廿七日

廿八日

春雨や桜ほの白く黄昏たそがる、  
春雨に桜煙りて日の暮る、  
桜咲く墓に詣づる人もなし  
荒墓に桜は今と咲き誇る  
無縁墓桜は盛り香供せん  
頑童の墓に登りて桜折る  
小供等の墓の廻りに花遊ぶ  
鳶高く桜の雲は棚曳きぬ  
桜雲の朝日に映えて鳶の飛ぶ

廿九日

朝陽の桜に映えて鳶風の舞寒ふ  
裏小路賤か家にも桜咲く  
今日見ずは悔も及はず花盛り  
天長の嘉節ぞ今日は花盛り  
天長の嘉節を祝ふ花盛り  
君か代は千代に色増す花盛り  
花盛り今日も炬燵の慕はる、  
特攻の眞心知れや花盛り  
空曇り風寒くして花盛り  
君か代を祝ふ桜は咲き匂ふ  
甘酒に君か代祝ふ桜かな  
決戦の今日君か代は千代八千代  
風もなく松に桜の散りかゝる  
満開の桜も今日は散り初めぬ  
開墾の小供等の手に桜散る  
拓かれし校庭の桜咲き満みてり  
盤梯の雪斑にて桜咲く  
苗代の打ならされて桜咲く  
汽車道の遠く走りて草青咲し  
風強く吹雪して散る桜かな  
行き行きて桜はつきす鶴か城  
日本一桜名所の鶴か城  
決戦の今日も桜は見事なり  
酔漢もなくて桜は賑合へる  
トンネルの桜を抜けて兵舎かな  
爛漫の幕引廻し練兵場

三十日

五月 一日

二日

當年の決血戰場や桜咲く  
城しろ槽やぐら趾あとに桜の花盛り  
お屋敷も茶席も今ハ花盛り  
桜散り楓若芽山吹に庭庭絵ぼどる  
春雨に芝青芽ぐみ赤椿  
春雨や山吹黄に椿紅紅  
春雨や昨日の栄花泥塗まれ  
鶴ヶ城昨日の栄花今日は夢  
待望の春雨降りて種子芽ぐむ  
喝望の雨を迎へて種子芽ぐむ  
春雨に濡れて勤勞奉仕哉  
春雨や今日も征くらん特攻隊  
春雨や街行く人の勇ましき  
鶴ヶ城ラッパの兵士勇しき  
散り桜足踏み入る、餘地もなし  
散り桜奥城白く雪の如く  
春雨に見る影もなき桜かな  
雪山の會津盆地は春さなか  
春小川つれ檻つを洗ふ里乙女  
春風に檻ほろを晒らす里乙女  
奥城に檻ほろを日向に晒らす阿摩  
校庭の桜敢なく児等騒く  
芝原に辨當遣ふ兵士たち  
春雨のまたも降るらし蛙鳴く  
開拓のこいし礫いし運ふや蛙鳴く  
南瓜とうもろこしの苗の太りて春たくる

三日

四日

五日

春雨に濡れて疎開の五人連れ  
疎開者に哀を添ふる春の雨  
食菊や紫苑を植うる疎開客  
盟國の元首斃れて春寒し  
百戦の苦闘空しく春寒し  
歐洲の制覇空しく春寒し  
昨日の英雄無殘春寒し

ヒトラ戦死  
独逸敗北  
同上

ムソリーニ惨死

五月

六日

春寒し街の家々戸を瑣し  
春寒し街行く人の足忙し  
花散りて空濠作り忙しき  
花散りて表の手入の忙しき  
濁醪のほろ酔ひ面に桜散る  
萩の餅握飯擴げ桜かな  
御馳走の重いろくの桜かな  
花もよし馳走なほ好き鶴力城  
槽趾弁当ひろけて桜かな  
弁当を見せびらかして桜かな  
散る桜弁当もなく酒もなし  
石に憩う翁媪の上に桜散る  
花荒し行交ふ人の勇ましき  
城の土手草に安らう花吹雪  
城の土手日向ぼっこや花吹雪  
驅け廻る小供等の上に花吹雪  
花吹雪休み處や心太  
花吹雪荒の中の心太  
心太芋汁もあり花吹雪

一日ノ回顧

七日

散る花の満地眞白き鶴ヶ城  
珍らしき人々も出逢ふ花見哉  
水飴に玉露を啜る疎開人  
荒蕪地の礫一つつ、拾ひ出す  
桜なき庭を色とる紅楓  
紅楓夕日に映えて目を見張る  
我が庭を紅楓ひとり賑合ハす  
八日  
春冷に雨の添はりて椿咲く  
春冷に障子瑣して書を讀む  
春雨に耕作休み書を讀む  
盤梯の雪を眺めて酒の宴  
濁醪の祝杯舉げて歓送会  
盤梯の馳走に寒し壮行會  
入團の人を送るや汁粉餅  
壮行に白馬汁粉や春寒し  
珍しや白馬汁粉の壮行會  
寒くとも眺めさせんと住持僧  
八升の汁粉の餅や壮行會  
笥子の話を聞けは里戀し  
戦災の劫火で焼き残す笥子哉

十日

應召の人を送るや雨寒し  
鯉節句孫等元氣の音信来る  
空襲を物ともせず鯉節句  
鯉節句敵機来ると奮ひ起つ  
敵来る菖蒲の太刀を餽けむ  
警報に學ひ舎の子等馳け帰る

舞子ヨリ繪書面



十二日

春冷に今日も無聊の脛を撫つ  
 春冷に終日籠り書を讀む  
 春冷に都の空の慕はる、  
 盤梯は雪か吹き来る風寒し  
 寒むくと軒並に店の瑣されて  
 看經の膚に泌みる隙間風  
 硝子戸の破目漏れ来る風寒み  
 葉桜に名残を惜む風寒み  
 鳴き初めし蛙音なし昨日今日  
 戦勝を祈る法師の珠數寒し  
 戦勝を祈る念珠の手の寒き  
 春寒や雑炊啜る疎開人  
 春寒や雑炊啜り煖を取る  
 雑炊を吹きく啜り温まる  
 春寒や雑炊の効偉大なり  
 舌を焼き雑炊啜る春寒し  
 春寒く雑炊啜り舌を焼く  
 春雨や室に籠りて音信書く  
 發着の汽笛を開けは子等思ふ  
 春雨や汽笛の人を驚かす  
 春寒や新湯に浸り雨を聴く  
 春雨や新湯に浴し昼寝する  
 新緑の庭を色採る紅楓  
 映え盛る花なき庭の紅楓  
 春寒く炬燵に在りて躑躅見る  
 躑躅咲けど春なほ寒き百日忌

十三日

十四日

旅にして又も勤むる百日忌  
 新緑に春まだ寒き百日忌  
 春待たて散りし理眞の百日忌  
 春寒く疎開の旅や百日忌  
 炬燵して庭を眺むる百日忌  
 春の夜の夢幻や百日忌  
 奥の旅春まだ寒き百日忌  
 西東想ひくくの百日忌  
 子等いかに春また寒き百日忌  
 山海の珍味揃へて百日忌  
 いろく馳走並へて百日忌  
 旅にして賑かなりし百日忌  
 八重桜山吹添へて百日忌  
 八重桜山ほど供へ百日忌  
 南瓜床人待顔の暖かさ  
 南瓜床南瓜店出す覚悟なり  
 南瓜床先つ盗人の心配し  
 南瓜床屋敷の中を探索し  
 南瓜床狸の皮の算用かな  
 色々の若葉に綴る東山  
 湯に浸り空を仰けは鳶の飛ぶ  
 湯に浸り眺め上くるや若葉山  
 若葉下山吹風に揺らめきぬ  
 若葉山山吹風に下に揺れ  
 色々の若葉交りに遅桜  
 見せはやな都の人に若葉山

十五日

十六日

行くに連れ眺めの變る若葉山  
奥津城の王者桜は截られたり  
満開の跡や空しき桜かな  
桜樹も截られ焼かる、世なりけり  
桜樹も摧け薪となる世なり  
有りかたや餡餅を食へて湯に浴る

十七日

決戦時草團子食へ湯に浸る  
戦災の人も多きに草餡子  
配給の不平等も他所に草團子  
草團子練の乾物春の雨

十八日

観音の何處の霊場も寒む寒し  
観音の霊場相して何願ふ  
寒げにて御氣の毒なる灌佛會

十九日

蓮華草蒲公英もなき灌佛會  
花御堂花も飾れぬ灌佛會  
接待の甘茶も出ない灌佛會  
本来空の眞の姿や誕生佛  
灌佛會團子は無くて心太  
久々に青天を見る灌佛會  
参詣もなく寂しき稚児佛  
釋迦の鉢少年時代思ひ出す  
釋迦の鉢五色團子の田舎寺  
空晴れて春まだ寒き灌佛會  
寒中の着物のまゝで灌佛會  
灌浴に漂へてお座す稚児佛

旧曆四月八日

二十日

甘茶糴錢五六文の灌佛會  
惡童の甘茶かぶせる稚児佛  
婆さんの小供手を引き灌佛會  
葉桜で眞籬造るや開墾地  
桜樹も籬根の代となる世なり  
笥子の丈長の伸ひて春寒し  
花も葉も萎縮れそうなり今日の風

廿一日

一本の鈴蘭採りて瓶に挿す  
飭氣もなく鈴蘭愛らしき  
一本の鈴蘭部屋に香を湛へ  
春陽に汗を流して畑を耨く

廿二日

雪國も畑耕せは汗流る  
いろくの新聞讀みて感深し  
春陽に急きて造る南瓜床  
春陽に甘藷の苗を假植す  
馬鈴薯の傍芽をかけは眞晝中  
鈴蘭は都も鄙も同時かな  
深緑に紅白躑躅小細雨降る

廿三日

鈴蘭の鉢に揃ひて咲き匂ふ  
七年の手入の跡や鈴蘭花  
鈴蘭の部屋一面に香に籠る  
雲間に浅緑した東山  
薄靄に夕陽目映ゆき東山  
鈴蘭や蕎麥かき食へて香をたしむ  
鈴蘭に蕎麥かき添へて味の佳き  
鈴蘭にそばかきの音信文にかく

井上彌書鈴蘭を仏に供  
したりとあり

廿四日

鈴蘭の室を出れば風寒し  
来ん年の鈴蘭見んと七十翁  
五六年先を夢むる鈴蘭花  
春待たて逝きにし人の遺品来る  
遺品かたみ来て想出多き春の暮  
遺品若葉時遺品に胸の痛むかなこそ今や仇なれ胸痛む  
かたみ手に涙またもの新たな若葉時  
五六年死なぬ積りの鈴蘭花  
庭先庭の筍飯や決戦時  
満腹の筍飯や敵機音  
愉たのしみ悦うれの筍飯や疎開客  
若緑昨日に似さる暖かさ  
だんだんくに脱きて二枚の暖かさ  
春暖や敵機襲来日に繁く  
清艶な姉妹に似たるチューリップ  
樹の陰に獨り頬笑む莖草  
青葉陰香かゆかしき莖草  
月朦朧おぼろ若葉に哽まふ奥の宿  
赤咲いて白つ、じ次またく寺の庭  
紅花楓陽光強く映え盛る  
戦時をも静に光る庭の樹々  
白つ、じ白蝶々の舞ひ遊ぶ  
枝傳ひ親に連れられ小雀の  
小雀の親の後追ひ枝傳ひ  
血戦の日なく雀は飛び習ふ  
ちび猫の蛙捕り食ふ若葉庭

廿五日

廿六日

空高く敵機かと思ふ鳶の飛ぶ  
戦争も知らずに小供蛙捕る  
空桶に旅人歎く心太  
奥地にも盡くる時あり心太  
切株に腰掛けて看る若葉庭  
腰下おちしつくぐと見る若葉庭  
児雀の飛ひ初めにけり若葉庭  
悠々と雲の行衛や春の夕  
風静かつ、じ灰に日の暮る、  
薫風に朧月夜の漫步かな  
春月や今宵も征くらん特攻隊  
薫風や都空恋あしき夕ま暮  
夕焼や今日の都空はいかあにある  
月おぼろ若葉の風や奥の宿  
焦土にも青葉残りて月圓まか  
春雷や敵盲爆のほどでなし  
春雷や夏の訪れ告ぐるらし  
勿躰な玉の宮居を盲爆す  
春雷や脱きし衣物を又重ね  
春雷や赤兒等の病む日なりけり  
風寒く硝子戸越しに躑躅見る  
風寒く若葉つ、しに日暮る、  
菜園の日に廣くなる東京都  
戦災の音たより信恐し知らまほし  
歸り見ん期望薄らく東京都  
焼夷弾死物狂ひの初夏の夜

廿七日

廿八日

廿九日

空高く敵機かと思ふ鳶の飛ぶ  
戦争も知らずに小供蛙捕る  
空桶に旅人歎く心太  
奥地にも盡くる時あり心太  
切株に腰掛けて看る若葉庭  
腰下おちしつくぐと見る若葉庭  
児雀の飛ひ初めにけり若葉庭  
悠々と雲の行衛や春の夕  
風静かつ、じ灰に日の暮る、  
薫風に朧月夜の漫步かな  
春月や今宵も征くらん特攻隊  
薫風や都空恋あしき夕ま暮  
夕焼や今日の都空はいかあにある  
月おぼろ若葉の風や奥の宿  
焦土にも青葉残りて月圓まか  
春雷や敵盲爆のほどでなし  
春雷や夏の訪れ告ぐるらし  
勿躰な玉の宮居を盲爆す  
春雷や脱きし衣物を又重ね  
春雷や赤兒等の病む日なりけり  
風寒く硝子戸越しに躑躅見る  
風寒く若葉つ、しに日暮る、  
菜園の日に廣くなる東京都  
戦災の音たより信恐し知らまほし  
歸り見ん期望薄らく東京都  
焼夷弾死物狂ひの初夏の夜

三十日

消し止めて言葉も出でず焼夷彈  
空襲につくづく思ふ仕合せさ  
空襲に堪忍すべし半風子  
筍と今日も背較へ疎開客  
夕焼も空襲かと思ふ春の暮  
筍の競うて伸る昨日今日  
雪枯れし藪を筍賑合し  
小甥も山の田植の勤勞に  
夕暗に端立ちて見ゆ白つゞじ  
青空に強き陽を背に鳶の飛ふ  
昼過ぎの晴れたる空に鳶の舞ふ  
冬支度單衣に變る奥の町  
松緑り黄粉飛んて香に咽せる  
青蛙溜りに四肢をふん張れる  
丸焼の音信の幾つ氣も滅入る  
焼跡に花や野菜の生ひ茂る  
初夏の青空高く鳶の飛ふ  
御佛に芍薬切りて上る  
六月 一日

二日

觀世音爺嫗集ひて詠歌する  
躑躅咲き杜鵑花も咲く奥の宿  
燕の青葉の梢を掠め飛ふ  
蕎麥團子蠣の吸物臯月雨  
片袖を濡して雨の招はれかな  
臯月雨午後半日の骨休め  
雨に濡れ庭の臯月の色まさる  
臯月雨青く暮れゆく寺の庭

六月

四日

三日 雨上り夕陽に若葉映えかへる  
南瓜苗すくく育つ寺の畑  
甘藷苗植込みて籬作る  
白黄の草に色取る田舎道  
仔馬連れ田甫耕す女馬  
段々といくつも登り山の畑  
嫁娘馬を追ひつゝ、田をは耨く  
女子か巧に馬と稻田耨く  
滔々と大湖の水の田に流る  
配給の太鼓の響く初夏の昼  
盤梯の姿變りて汗にじむ  
五日 快晴に暑氣急激に躑躅散る  
躑躅臯月昨日に變る暑さ哉  
筍子も皮脱き棄る暑さかな  
開墾の膚に爽け若葉風  
山里の土産の杖や初夏の庭  
茄子南瓜胡瓜も植えて寺の畑  
細雨して西風寒く躑躅散る  
脱き棄てし綿入取出す寒さかな  
芋植えて蕃茄を植えて漂へ居る  
顛えつゝ、芋やとまとを植えてゐる  
六月 五日

八日

夕暮の若葉の庭に鳥騒く  
爽かな若葉の風に日暮るゝ  
筭艶豆豆腐の汁に豆の飯  
晩春の會津平野の黄昏るゝ  
夕暮の水田に騒く蛙かな

駒板に弟、甥を訪ふ

- 夕暮の蛙合奏す濠の中  
晩春の水田暮れつ、鳥歸る  
菜園の愛撫過きたり目眩む  
九日 晩春の今日の西風身に沁みる  
十日 天晴れて春の陽氣や疾痊ゆ  
警報に病忘れて陽を眺む  
十一日 決戦の今日此頃や武者人形  
濃淡の紅の皐月に庭映える  
戦災の都の土産や若葉庭  
十二日 晩春の雨を聴きつ、湯に浸る  
晩春の雨の日中や湯に浸る  
筍の秀づる彼方皇軍機  
筍の秀つる空や鳶の飛ふ  
深淺の緑の庭や紅皐月  
萬緑の若葉の庭や紅皐月  
湯浴して色鮮かな若葉かな  
十三日 ずぶ濡れて茅卷の笹の採られけり  
竹の皮茅卷縛りや武者節句  
夕映の空を燕の翅け廻る  
夕映に赤く染りて雲の行く  
盤梯の夕日に映えて若葉風  
夕映に思ふ沖繩の血戰場  
笹卷の黄粉團子や武者節句  
笹卷に配給腹の児等想ふ  
十四日 特攻の將士の姿武者人形  
十五日 鯉鈍に鮎汁もあり皐月かな
- 東風に噓めをしつ、皐月哉  
武者の節祝の宴に家空し  
親類か顔を揃へる武者節句  
校庭に見下ろす田甫若葉風  
十六日 湯の町は應召騒き若葉山  
疎開児等勤勞奉仕大豆菟麻子  
乙女等の勤勞隊や田植哉  
應召に空しく帰る田植道  
十七日 春の夕甚兵エ料理茶も呉れす  
街道の土を吸ひつ、燕飛ふ  
夕間暮街路傳ひに燕とぶ  
廣庭に六斗釜や豆を煮る  
十八日 大釜に杉根焚かれて豆煮える  
味噌捏ねや家中舉りて大騒き  
味噌捏ねや驚き瞳る都人  
味噌捏ねや若葉の風に薫る時  
晚餐は豆盡なり味噌造り  
十九日 晩風や昼に引替へ肌寒き  
萬緑の裡に目に立つ美人草  
特攻の勇士の心臓や雛罌栗  
一億の生命の糧や田を植うる  
北海の廣野行きたし老を如何に  
空襲の恐怖を他所に北の國  
二十日 群雀に半歳の苦心水の泡  
麥實る農夫雀に呆然たり  
麥に雀芋に盗人如何にせん

廿一日

麥の畑追へと又来る雀かな  
 増産も雀に溢路麥の畑  
 麥の畑喜ひ群ふ雀かな  
 追へは樹に去れつ又来る雀かな  
 雀害は都も鄙も同じなり  
 増産や雀盗人の餌になり  
 南瓜棚美事に出来て實るを待つ  
 素人の麥の歎や群雀  
 増産や吾も後れし南瓜棚  
 這へは立て立ては歩けの南瓜棚  
 實り花の目につく南瓜昨日今日  
 沖繩の空を眺めて南瓜棚  
 戦災の噂嘶や皐月空  
 空襲の劇しさ増さる皐月空  
 帰るへき望も薄き五月空  
 手を舉げりやバスは湯の町若葉山  
 先つ日の白田は青くバスの路  
 疎開児の蓖麻や大豆は生ひ育つ  
 深緑に赤松並ふ温泉の山  
 深緑の膚に映らう温泉の中  
 若葉湯の老には辛らき段梯子  
 閉ちし眼に青き幻若葉山  
 谷川も緩く流れて若葉山  
 深緑の山深々と温泉の町  
 山膚も蔽ひ隠くして深緑  
 深緑湧く雲の如東山

廿二日

廿三日

綿羊の脊中や緑深き山  
 先つ日の山膚見えす深緑  
 深緑紅がら屋根の温泉の宿  
 湯を上り緑の山に御名唱ふ  
 湯上りに深緑の山に合掌す  
 御佛の直の姿や若葉山  
 深緑の山懐の温泉の宿  
 湯上りを若葉の風や滝の音  
 青葉宿疎開児童に傷病兵  
 深緑の宿に疎開児手球つく  
 厭きすつく手球早乙女若葉宿  
 傷病兵晩の勤や旗に禮  
 谷川の浅瀬に遊ぶ疎開児等  
 雛燕軒端傳に温泉の宿  
 群燕深緑の空翔け廻る  
 豫科練の若者達や雛燕  
 三月目にト口の刺身や深緑  
 夕暗に深緑の山融けて消ゆ  
 深緑の宿を見棄て、帰る客  
 月明り下谷川に河馬鳴く  
 朝まだき出入はけしき雛燕  
 羽馴しに精根つくす雛燕  
 南溟を凌ぐ日の為ひなつはめ  
 幾千の小燕翔ける温泉の町  
 色々の若葉は融けて深緑  
 増産の望も豊か青田かな

廿四日  
決戦を他所に伸ひく／＼南瓜哉  
空襲も知らぬ顔なる南瓜哉  
雀害に目も當てられぬ麥畑  
幹を脱き杖順々に竹の皮  
五月雨を冒して翔る雛燕  
暮る、まで翔り止まない雛燕  
五月雨の歇んで又降り日暮る、  
廿五日  
梅雨晴の周圍の山の青々と  
梅雨晴の夕暮の風爽かに  
送別の馳走牡丹餅豌豆汁  
磨胡桃大牡丹餅に豌豆液  
増産の南瓜は町の軒並に  
増産の南瓜壁越え庭の裡  
廿六日  
梅雨晴に白馬飴餅客送る  
別れては何時また食はん飴の餅  
虎杖に空濠何處奥の寺  
虎杖の跋扈空濠見え別かず  
餅の馳走湯桜待や五月晴れ  
昨日も今日の馳走の臯月晴れ  
増産も頼り少き甘藷畑  
何の畑も美事に實る莢豌豆  
廿七日  
梅雨晴や衣物一枚また一枚  
初春の上海音信初夏の空  
廿八日  
焼跡に向つて帰る臯月晴  
目も暉む梅雨晴の日に蔓延る  
南方の戦場忍ふ臯月晴

三十日  
盤梯も霞みて見ゆる五月晴  
来る人に歸る人あり五月晴  
巢立して少くなりぬ雛燕  
バルコンに裸体で字読む疎開兒等  
湯上りを若葉の風に吹かせ居り  
沖繩の玉碎偲ひ水を飲む  
湯上りに袂吹かせて薫る風  
七月 一日  
朝夕は出入多き雛燕  
朝夕に景色の変る若葉山  
来る毎に色の濃くなる稲田哉  
南瓜の交配今日は第二號  
北奥の驛の別れや梅雨曇  
櫻桃孫等に贈るよしもがな  
兒等の八時母の苦心や櫻桃  
食へ飽きる兒等もあるのに櫻桃  
晚餐は牛の煮込みや湯で卵  
特攻の親の心や梅雨時雨  
孫たちと一所ならはと櫻桃  
沖繩の玉碎ラヂオ梅雨時雨  
増産の戸毎に豌豆大豆南瓜  
特攻の勇士に祈る蓖麻の苗  
梅雨晴の夕焼雲や蜻蛉飛ぶ  
梅雨晴の夕焼の空に合掌す  
七月 四日  
五月空雲の行衛や温泉の町  
越して行く荷物車や五月雨る、  
老翁の旅寓に病つく五月雨

- 皆越して二人残りし五月雨  
五月雨に移り行く人親子連れ  
五月雨にセル取り出す翁かな  
一日の梅雨暗霽れて夏日照り  
勤勞の汗を拭へは風薫る  
深緑の風に膚を任せけり  
目に若葉膚に微風敵機なし  
井戸屋形南瓜の棚奥の寺  
引越の家族五人や梅雨時雨  
食料の工面の旅や梅雨時雨  
五月雨に母娘二人のも合ひ傘  
五月雨に傘借りて行く親娘連れ  
都には焼野なからに天の川  
戦災の都の空に天の川  
梅雨晴やセルにドテラの寒さ哉  
庭先の開墾畑甘藷植える  
頑張るや七十翁増産に  
間食に児等は胡瓜を丸噛り  
面に餘る胡瓜を噛る児共たち  
七夕の父の祭や敵機来る  
天の川恋の神話や敵機来る  
増産の今日も甘藷の畑作る  
中小の都市の空襲梅雨時雨  
梅雨冷や警報頻り甘藷植える  
梅雨冷や盤梯山は白斑ら  
梅採や児等は麻疹に母の傍
- 七月 五日
- 七月 十日  
警報の頻り鳴るなり梅を採る  
枝拂ひ南瓜絲の棚造る  
空襲に念佛踊り梅雨冷える  
梅雨冷に空襲頻り念仏講  
追ひくゝに実のりを見する南瓜哉  
空襲は頻なれとも南瓜かな  
明日の日の焼夷も知らず南瓜哉  
空襲の噂話や五月雨る、  
五月雨や濡れて南瓜の花を見る  
軒下に草履造りや五月雨る、  
終夜蚤のゲリラに朝寝哉  
空襲と蚤のゲリヤに悩まされ  
空襲の今宵も知らず絲仏棚  
増産の之も一役絲仏棚  
骨折つて實花を落す南瓜哉  
敵襲に寫眞つくぐ孫の顔  
空濠の造作切り南瓜成る  
古里は大半罹災梅雨晴れる  
空襲の騒を他所に山青し  
梅雨強く警報も出て、昼眠る  
入営の若者来る梅雨しげし  
戰燹の宿は何處そ梅雨しげし  
空濠も水深かくと梅雨はげし  
世話焼ける南瓜嬉しく台造る  
茶の相に梅を噛ちりてラヂオ聴く  
土臺棚釣台までも南瓜哉
- 七月 十一日
- 七月 十二日
- 七月 十三日
- 七月 十四日
- 七月 十五日
- 七月 六日
- 七月 七日
- 七月 八日
- 七月 九日



七月十六日

事なくて今日梅雨晴れの日を仰く  
 歓送かんそうに強飯馳走梅雨晴る、  
 深緑ふかきや眠る赤児あかごの面かほに映うつえ  
 梅雨晴れて入営送る夕間暮れ  
 今日もまた梅雨に籠りて唐詩誦す

七月十七日

空襲のサイレン頻り梅雨はげし  
 特攻の勇士の父母や梅雨季節  
 北海の人に幸あれ梅雨冷ゆる  
 土用近き今日此頃や綿入めいご着る  
 神風ハ吹かぬものは夷機荒る、  
 梅雨つゆに濡れ梅実うめを採るなり大和尚  
 あるたけの衣物重ぬる梅雨の冷え

七月十八日

晴れ曇る梅雨の空や敵機来る  
 北海の音信絶えて梅雨寒き  
 久々に山の雄姿や梅雨上り  
 磐梯の色も黒々梅雨晴れる  
 降り續く梅雨空霽れて陽光を仰く

七月十九日

馬鈴薯いも盗どろは家うちの手荒な女中なり  
 成りかけし南瓜も落ちる梅雨冷え  
 焦土やぶちに夏は帰れと友は言ふ  
 戦略か空襲頻り奥の空

七月二十日

北海の今日も沙汰なく梅雨しぐる  
 焼跡に来て耕せと友は言ふ  
 土用の入の天気は雨の當て外はつれ  
 海邊はたの小供なつかし土用入り  
 降り續く雨に南瓜は萎縮する

七月廿一日

七月廿二日

昨夜よべの月今日の五月さみたれ雨憂世なれ  
 起き出て、西北風に氣も晴れる  
 久々に青天仰うき梅雨晴れ  
 腕伸し置き所なき南瓜かな  
 何處までも這たよりひずり上る南瓜かな  
 上海の端午の音信梅雨晴る、  
 上海の端午は雨と梅雨の晴れ  
 青空はたゞ一時の梅雨曇り  
 山々は雲垂れ籠めて梅雨曇り  
 芋菊たごに春菊添へて献供たごる  
 土用三郎相も変らぬ寒さか那  
 梅雨や四方の山々被衣かづきぬぎ  
 街中の南瓜は棚と蔓ばかり

七月廿三日

七月廿四日

待望の土用の陽氣や青嵐  
 青嵐肌あせに沁る田甫道  
 畑田甫見渡す限り青嵐  
 青田甫山の眺めや佗住わひすま居  
 長雨に茄子も胡瓜も草の叢  
 食料の心の雲も空と晴れ  
 増産の神の助や空霽る、  
 決戦に神助驗あり空晴る、  
 青田甫昼には風の生温るき  
 青田道疎開の車駱驛と

七月廿五日

いろいろの馳走ちそうに増して青嵐  
 北海の音信来らす空曇る  
 炎天の三日續かず又曇る

七月廿六日

七月廿七日

夕空を小燕高くく飛ぶ  
疎開車の街に連なる夏の夕  
秋播はなくて春をば買ひ戻る  
はひ胡瓜誰か爲に播く都人  
帰つても誰か喜ふはひ胡瓜  
雲つても土用なりけり奥の街  
昨日今日微され行く人誰や彼  
兒等置いて召され行く人夏真中

岩崎廿六日、久米廿八日  
召入當

七月廿八日

朝露の芋菊採りて供養する  
赤うなみ兒なみ子なみに睡氣醒すや夏の昼  
朝夕は秋かと思ふ奥の土用  
空襲かなくばこよなき奥の夏  
底紅の葵あわれに鉢に咲く  
我が留守に誰か水遣る菊の鉢  
菊萎れ水を施す人もなし  
帰り往く心残りや菊の鉢  
南瓜ほど今は好かれぬ菊の花  
蟬の聲たえて聞かなく奥の町  
蟬なくて仰くこと稀れ奥の児等  
蟬鳴かず夏らしくなき奥の町  
現うつにも蟬の聲する夏の昼  
隊に入りて何を思ふか夏の夜  
朝露を踏んで芝生を歩みけり  
晚景の芝生の色の青き哉  
涼風を芝生の上に肌に入れ  
一日の暑さを思ふ夕かな

春似来丹精菊鉢今旺盛  
に成長す

七月廿九日

七月三十日

夕空を眺め今日の暑さかな  
暑に中り半日卧床涼氣来る  
深緑の庭に一鉢紅葵  
全快の祝の宴や夏の夕  
日落ちて庭にイみ涼を呼ぶ  
深緑の薫と共に涼来る  
日中ハされども暑き會津哉  
見詰まむれば眩くらめく如き暑さ哉  
小供らは帽子も着けず暑さ行く  
米晒す雀物うし夏の昼  
炎暑にも竹さらくと風涼し  
炎天の空高く飛ぶ小燕ら  
青空を高くく飛ぶ雛燕  
炎天下を乳母車押す老お媪なかな  
炎天を老婆は孫を押しして行く  
炎天下大鋸の木挽かな  
身に餘る大鋸や炎天下  
炎天下白米晒す和尚かな  
見る度に大きく育つ南瓜哉  
三本に赤丸長き南瓜かな  
日落ちて昼の暑さを忘れけり  
身長ほどの胡瓜小供ハ抱へ込み  
點心に生の胡瓜や都人  
唐茄子の起き上り小坊がし子其處此處に  
草叢の茵さき楽しく南瓜寝る  
杖端さきに葉を掲げ見る南瓜哉

七月三十一日

八月 一日  
 見る毎に蔓危ぶな氣な南瓜哉  
 競走の蔓の延ひ行く糸瓜哉  
 東風も負けずに伸ひる野菜畑  
 漸くに棚に届かん夕顔の  
 交配に朝は世話しき南瓜哉  
 幾たひも南瓜の顔を見て廻り  
 蟬鳴かず耳に蟬聞く聲かな  
 蠅視ふ蜥蜴を窺ふ虎毛かな  
 奥地にも蟬は鳴くなり聲細き  
 朝夕の風は極樂奥の街  
 信濃地の山もかゝらん奥の朝  
 丹精の南瓜奉る八朔に  
 丹精の南瓜六百三十目  
 待つ人の来なく帰の道暑き  
 丹精の南瓜馳走の料に成り

八月 二日

朝夕の涼氣遣ふ疎開客  
 炎熱も時に樂しき夏の昼  
 茶を飲んで膚に涼風八つ下り  
 炎天に之も生業木挽引く  
 豌豆の種採収や土用日中  
 迎人今日も来らず日落る  
 北の空今日も空しく日暮る、  
 空濠の手傳ひ汗に蚊に悩み  
 北海の無事の帰還や膚涼し  
 八月 四日  
 甘く見た奥の日盛り目も眩む

八月 五日

落付いた今日も日盛り目か眩み  
 取つて置き服を持出す暑さかな  
 誰れ彼れと連れて南瓜を算へけり  
 寺有の青田眺めて夕餉かな  
 炎熱の望の青田馳走かな  
 茲も又火宅なりけり土用の奥  
 場所を替へ向きを變へても夏真中  
 上衣脱き下着も脱いて土用日中  
 炎天に蟬の後追ふ小供かな  
 長竿に蟬視らひ居る小供哉  
 奥地にも蟬は追はる、小供等に  
 流汗は淋漓たり濠を掘る  
 濠を掘る樹の下陰も汗流る  
 汗泥の檻樓の子彼に親もあり  
 女ん子も丸裸なり水遊ぶ  
 バス待つ間驛の廣場の暑さ哉  
 大人も今日は胡瓜の丸嚙り  
 燕も少くなりぬ土用の温泉  
 電線にずらりと並ふ燕かな  
 深緑の山も炎暑に蒸せ霞み  
 傷兵の山女釣り居り温泉の川  
 小供等は山谷川を這ひ廻り  
 水もぐり山女は捕れず涼を取る  
 炎熱も茲までハと思ふ温泉の町  
 温泉は土用さ中のものならず  
 小童の盲泳きや川淺き

八月 七日  
 一つづ、千切られて行く南瓜哉  
 六尺の置き所なし土用の昼  
 秋立ちて昨日ほどでなき暑さ哉  
 山峡の黄昏れ時や夢現うつつ

八月 八日  
 秋立ちて残りの雪の疎開人  
 秋立つや南瓜枯葉の二葉三葉  
 秋立つや成り花を見ぬ南瓜哉  
 秋立つや庭の躑躅の坊主苺  
 秋立つや七日七夜の梅仕舞ふ  
 秋立つや敵機来襲弥か上に  
 秋立つや萱の大屋根邪魔にされ  
 炎天を緩々と行く老婆かな  
 乾梅に夕立来り直ぐ晴れる  
 空襲に暑さを歎なげこつ閑もなし  
 手荷物を運ひ出し入れ暑さ哉  
 南北に阿修羅の戦闘夏さ中  
 藁草履の稽古始めや汗淋漓  
 時雨晴れて黒猫蛙を狙ひ居り

八月 十日  
 谷川も炎天續き水涸る、  
 溜々の水音も絶えて温泉の滝  
 蜩の鳴く聲世話し日暮る、  
 蟬にも蜩だけはなつかしき  
 水神の石碑空しく水涸る、  
 日照り雲睡氣を誘ふ空の色  
 盆報に奥の残暑の日暮る、

八月十一日  
 盆祭り何れの墓も艸茂る、  
 盆祭り墓の艸採る人稀れに  
 盆祭り墓廣くして艸多し  
 盆祭り墓の合間の野菜畑  
 盆祭り胡桃茂りて墓淋し  
 盆祭り墓に詣つる人稀れに  
 盆祭り悪童墓域を荒し居り  
 盆祭り一年中の沙汰を詫び  
 炎天に汗を流して墓掃除  
 墓掃除除ける草を薪に積む  
 一年の浴湯を焚く薪や墓掃除  
 炎熱の半日忘れ草履作り  
 凸凹の草履に暑さ忘れ居り  
 屋根上の南瓜盗人や星明り  
 馬鈴薯の袋を捨つる野菜盗人  
 御自慢の南瓜振舞ふ老婆哉  
 丹精の南瓜百には稍足らず  
 南瓜も姿あはれに秋立ちて  
 朝起の南瓜衰へ秋立ちぬ  
 御佛に供へまつらん花もなし  
 盆祭り心元なき供へ花  
 半月日照續きや茄子萎る  
 灌水に汗の流る、茄子の畑  
 新盆に迎へ祀らん棚もなし  
 新盆に共に拜かまん兒等あらず

八月十二日

八月十三日 新盆を二人淋しく旅の宿  
盆祭り英霊の墓巡禮す

新盆の英霊の骨幾柱  
大旱に雲霓望む盆祭り  
待望の雨夜半過ぎ戸に當り  
乞食の焚火堂下に雨真中  
唐越の焚火夜半の一大事  
待望の雨も半途に足踏し  
戦争も暑も忘れ草履哉

八月十四日 新盆し花ヨリ外に供物なく  
新盆の精霊多き今年盆  
誰彼の眼に浮ふ盆祭り  
精霊の行き所なき盆祭り  
七夕を今も祝ぐ田舎人  
詔敕り賢しも悲し盆祭り

今日は舊暦七月七日  
無條件降伏の詔敕

八月十五日 幾百万の犠牲も空し盆祭り  
天か人が悲しあたら盆祭り  
驚きに涙も出てす盆祭り  
一憶の胃張り裂ける盆祭り  
呆然と炎暑の空を眺め上げ  
戦敗も暑さも知らず蟬取り

八月二十日 蟬の聲に壕も畑も見え別かず  
道の奥も蟬取る兒等は精を出し  
早魘を吾か代とぞ鳴く蟬の聲  
炎熱を何處に避けん道の奥  
炎天に沙塵巻く鬼ごっこ

八月廿一日 兒童等に何の苦熱か之あらん  
有りたけの竹を持出し蟬を追ふ  
籬根なく畑に目なし蟬取る子  
蟬を追ふ兒等に籬根も畑もなし

八月廿五日 夕立の降り損つて蟬時雨  
雨を待つ大根播きや空仰く  
水泳に耳を疾む児や蒸し暑さ  
稲穂田の風香はしくカレイ食ふ  
管制も解けて稲田に燈かけさす

八月廿六日 合同葬どの遺族にも汗の球  
無き人の事を思へは暑さかも  
遠雷も近く聞ゆる照り續き  
神風に異國の軍も日を延し  
鮎の子に子子水の澄みにけり

八月廿八日

- 注  
(1) 「父子の情」(昭和二十七年七月「小説公園」)  
(2) 「坊さんらしい人―父を語る―」(掲載誌は未詳。『武田泰淳  
全集 全十二巻』に収録)

〈以下別稿〉

〔付記〕

本稿をなすにあたり、大島淑氏のご高配により、大島泰信の貴重  
な句集を閲覧させていただき、それを論文化することの許可をいた  
だいた。また、多くのご教示を賜った。ここに深く感謝申し上げ  
る。